〈企画研究〉

石狩市における特別支援教育学生ボランティアに関する調査研究

今　野　邦　彦（藤女子大学　人間生活学部　保育学科）
橋　本　伸　也（藤女子大学　人間生活学部　人間生活学科）
伊　井　義　人（藤女子大学　人間生活学部　人間生活学科）

本学保育学科では特別支援学校教諭免許が取得でき、希望者が特別支援学校でのボランティア活動や教育実習を行ってきたが、これまでは地元石狩市の特別支援教育との関係は希薄であった。そこで、保育学科の学生が石狩市の特別支援教育にどのように貢献できるのかを探るべく、特別支援学級設置校を対象に調査を行った。

その結果、石狩市内の小中学校の特別支援学級における学生ボランティア活用の可能性として、授業中、休み時間、放課後、学校行事などの場面が考えられ、そのニーズがあることが明らかになった。課題としては、学生の時間調整・日程調整、対象校までの交通機関、予算などがあげられた。

キーワード：特別支援教育、特別支援学級、学生ボランティア

1．はじめに

藤女子大学は、人間生活学部が置かれている石狩市との間でこれまでも数多くの連携事業を展開してきた。特に教育の分野においては、2002 年から石狩市のスクール･アシスタント･ティーチャー（School Assistant Teacher：SAT）事業を通じて、学生が市内の小中学校で授業の補助を行い、子どもの学習を支援するボランティア活動を続けている[1]。阿部ら[2]によれば、この SAT 事業の学科別参加数では、人間生活学科だけではなく、食物栄養学科の学生の参加者も増加している。

保育学科も、これまで地域との連携事業として、子育て支援､市民ミュージカルへの協力､商店街でのロードペインティングなどの活動を行い、地域貢献の役割を果たしてきた。また保育学科では、ほとんどの学生が幼稚園教諭免許と保育士免許を取得するが、約半数の学生は特別支援学校教諭免許も取得している。特別支援学校教諭免許取得希望者は特別支援学校や児童デイサービス等でのボランティア活動に励み、4 年時には特別支援学校での障害児教育実習を行っている。

しかし、保育学科の学生が特別支援教育の対象となる児童生徒と関わる場は、そのほとんどが札幌市を中心とした特別支援学校でのボランティア活動や教育実習である。地元石狩市には、2011 年に北海道星置養護学校紅葉山校舎が開設されるまでは特別支援学校がなかったことから、これまで本学と石狩市の特別支援教育との関係が希薄であったことは否めない。

そこで今回は、特別支援教育を学んできた本学保育学科の学生と石狩市の特別支援教育との関係について、本学の役割や貢献の可能性を探求すべく調査研究を行った。なお、いずれの調査も石狩市教育委員会教育支援センターの協力を得て実施した。

2．調査Ⅰ

・目的

石狩市内小学校・中学校の特別支援学級における、学生ボランティア派遣に関する意識を明らかにする。

・対象と方法

石狩市立小学校･中学校全 21 校のうち、特別支援学級設置校である 18 校（小学校 11 校、中学校 7 校）を対象に、学生ボランティア派遣の可能性について質問紙調査を実施した。質問項目の作成にあたっては、文部科学省の特別支援教育関係ボランティア活用事例集[3]から、実践事例として取りあげられている支援例

を参考にした。

回答は各校の特別支援学級担当者のうち代表者１名に依頼した。調査時期は 2014 年２月であった。

・結果

回答数は 18 校中 13 校で、回収率は 72％であった。

質問項目と回答数は表１のとおりである。なお、問１については複数回答があったため実数よりも多くなっている。

問１では、調査の時点でボランティアを⑴「利用したい」と回答した学校が４校、⑵「これから利用するかどうかを検討したい」と回答した学校が６校であった。ただし、⑴⑵の両方に回答した学校が１校あったため、実数では⑴⑵の合計は９校であった。

利用の内容としては問２の通り、⑴教員が授業を進める際の補助、すなわち授業場面・学習場面での支援を想定した回答が７校と最も多く、次いで⑹行事支援が５校、⑷安全確保のための見守り、⑸休み時間などの遊び相手が４校であった（複数回答）。また、その他としては「話し相手」という回答も見られた。

問４で期間や回数の希望を質問した結果は学校によって様々であったが、「通常学級のボーダーラインの生徒への支援」という特別支援学級外への支援を求めるものもあった。

一方、問１で⑶「利用する予定はない」とした学校が４校あった。問３から、その理由は、「日程などの調整が難しい」「学生への指示・指導に時間がとられる」「生徒が少ないので」「遠いので」というものであった。

表１　調査Ⅰ「石狩市における特別支援教育学生ボランティアの活用に関する調査」の結果

問１	ボランティアの利用については現時点ではどのようにお考えですか（番号に○をお付け下さい）	
	⑴利用したい	４校
	⑵これから利用するかどうかを検討したい	６校
	⑶利用する予定はない	４校
問２	⑴または⑵の場合、次のどのような利用が考えられますか（番号に○をお付け下さい。複数回答可）	
	⑴教員が授業を進める際の補助	７校
	⑵車いす、移動などの介護	１校
	⑶生活面での支援	２校
	⑷安全確保のための見守り	４校
	⑸休み時間などの遊び相手	４校
	⑹行事支援	５校
	⑺放課後支援	３校
	⑻その他	話し相手
問３	⑶の場合、その理由をお教えください。（番号に○をお付け下さい。複数回答可）	
	⑴利用するメリットがない	０校
	⑵日程などの調整が難しい	２校
	⑶子どもがなじみづらい、落ち着かない	０校
	⑷学生への指示・指導に時間をとられる	１校
	⑸その他	生徒が少ないので。遠いので。
問４	⑴または⑵の場合、期間や回数に希望がありましたらお書きください	
	・国語、算数の支援を希望する	
	・運動会、校外学習での支援を希望する	
	・週１～２回で、４月～７月、１～２月を希望する	
	・間は空いても４～５回くらいは来てもらいたい	
	・年間を通して、出来るだけ多くきてもらいたい	
	・学校の日程に合わせてきてもらいたい	
	・その時の状況による	
	・通常学級のボーダーラインの生徒にも支援をしてほしい	
問５	その他要望等がありましたらお書きください	
	・長期間かかわれる人を希望する	
	・予定を守れる人を希望する	
	・スポーツができる人を希望する	
	・子どもだけでなく、親、教師などともふれあってほしい	

3．調査II

・目的

学生ボランティア利用の希望がある特別支援学級について、さらに詳細な調査を行い支援の実現の可能性を探る。

・対象と方法

調査Ⅰで、「利用したい」もしくは「これから利用するかどうかを検討したい」と回答した9校（小学校6校、中学校3校）を対象に、聞き取り調査及び学校視察調査（授業参観等）を実施した。

調査時期は2014年3月であった。

・結果

調査IIの結果は表2の通りであるが、実際に聞き取りや授業見学を行ったところ、児童生徒の実態、学級の規模はもとより、授業形態、交流学級との関係、放課後の支援体制、行事の取り組みなどが学校によってそれぞれ異なるため、「利用したい主な場面」「特別支援学級の教員の要望」も各学校、各学級のニーズによって様々であった。

4．考察

(1)　利用希望の有無

調査Ⅰからボランティア利用の希望についての回答をみると、「利用したい」と回答した学校はいずれも石狩市内では特別支援学級の規模が大きく、特に小学校で利用を希望したのは次年度の児童数が上位3校の学校であった。このことから、まず児童生徒数が多い学校でボランティア利用の希望が強いことがわかる。

黒住ら（2008）[4]は、小学校の管理職・担任を対象とした特別支援教育に関するアンケート調査で、担任の約4割が「特別支援を実行するためにもっと人手が必要だ」と訴えていたことを踏まえ、「現場はまさに猫の手も借りたい状態であり、ここで注目されるようになったのが大学の学生等による支援である」と述べている。

このように特別支援学級の現場では、まずは支援の手を増やす手立てとして学生ボランティアの活用を考えていると思われる。

また今回、「利用する予定はない」と回答した学校と調査自体に回答がなかった学校は計9校であったが、そのうち5校はいわゆる市街地以外に位置する学校であり、問3の回答にも見られるように、「児童生徒数が

表2　調査II　聞き取り調査、学校視察調査の結果

学校名	利用したい主な場面	特別支援学級の教員の要望
A小学校	個別学習や国語、算数の時間の支援。 交流学級に入っている児童の支援。	できるだけ多く来てほしい。
B小学校	生活支援。安全確保の見守り。中休みなどの遊び相手。放課後支援。	予定を守れる人、スポーツができる人に来てほしい。
C小学校	授業中の個別支援 交流学級での見守り 学級行事 放課後支援	年間を通してできるだけ多く来てほしい 子どもだけでなく、親、教師などともふれあってほしい
D小学校	日常の授業では、個別学習の支援。 休み時間の遊び相手（手遊び等） 冬季はスキー学習の補助。 運動会では人手不足が予想されるので支援に入ってほしい。	週1～2回を希望。
E小学校	運動会の総練習、本番で、担任が抜けるときに児童をサポートしてほしい。 校外学習の支援。	行事の時に支援してもらうと助かる。
F小学校	運動会、学芸会の総練習、本番の支援。	授業時は比較的余裕があるので、行事の支援に来てほしい。
G中学校	作業学習、交流学習、体力づくりなどの授業中の個別支援をメインに、放課後支援も月に1～2回。	さらに通常学級の生徒への支援も学校として大きな課題。
H中学校	生徒と一緒に授業に入り、授業のサポートをしてほしい。	やる気のある人に来てほしい。
Ⅰ中学校	グループワークの時に一緒に活動してほしい。 休み時間の遊び相手。 文化祭の準備。	生徒が少人数のため、にぎやかにしたい。 一緒に遊んでくれる人、話をしっかり聞いてくれる人。

少ないこと」「距離が遠いこと」が学生ボランティア利用についての判断に影響していると考えられる。

⑵　利用したい場面

学生ボランティアを「利用したい」及び「これから利用するかどうかを検討したい」と回答した学校について、ボランティアの活用が予想される場面を、調査Ⅰ、調査Ⅱの回答内容から考察した。

最も多かったのは、通常の授業中の支援であり、国語・算数の時間、または個別学習の時間の支援であった。これは児童生徒数の多い学級では、教員一人あたりの担当児童生徒数が多く、きめ細かな指導が行いにくいという実態があるためということが予想される。

また同じ授業中であっても、特別支援学級の児童生徒が通常学級へ出向いて交流学習として授業を受けている際の支援・見守りという回答も多数見られた。これは、場面としては指導者と児童生徒が１対１で関わることになるが、通常学級での授業内容の理解や他の児童生徒との関わりへの支援、また児童生徒の活動の見守りといった役割を期待されているものと考えられる。

授業時間以外では、休み時間の遊び相手という回答、放課後支援という回答がいずれも３校からあった。休み時間の遊び相手については、児童生徒数の多い学級では安全確保の側面もあり、少ない学級では一緒に集団を構成して活動を盛り上げてほしいという要望があった。

その他では、運動会、学芸会・文化祭などの学校行事、校外学習、スキー学習などの場面での利用希望があった。学校行事では、練習・総練習・本番を通して、特別支援学級担任も学校全体の係の一員として行動することが多く、どうしても人手不足になりがちである。また、バスなどの公共交通機関を使っての校外学習やスキー学習では、乗車券の購入指導や外食時の指導、個別指導、安全確保など、様々な場面で指導者数が不足しており、学生以外の地域ボランティアや、SAT を利用している学校もあった。

特別支援教育における学生ボランティアに関する研究には、先述の黒住ら(2008)のほか、山本ら(2009)[5]、山本 (2013)[6]、土居 (2012)[7] などがあるが、いずれも通常学級において特別な支援を必要とする児童生徒への関わりを検討したものである。また岡本 (2007)[8] の報告は特別支援学校におけるボランティアに関するものである。

小学校・中学校の特別支援学級における学生ボランティアについての報告はまだほとんど見られず、その支援内容については児童生徒・学級・学校の実態に応じて検討されるべきものである。

⑶　教員の要望

ボランティアの利用について、利用場面・内容以外の要望も尋ねたところ、様々な観点からの要望があがった。

まず頻度については、「できるだけ多く」「週１～２回」「間は空いても４～５回は」などの回答があり、また特に小規模の特別支援学級では「普段の授業時は比較的余裕があるので、行事の支援に来てほしい」といった希望もあった。

学生に求めものとしては、「予定を守れる」「スポーツができる」「やる気がある」「一緒に遊んでくれる」「話をしっかり聞いてくれる」などがあがった。さらに、「親、教師などとも積極的にふれあってほしい」と、ボランティアを通じて学生の成長を期待する回答もあった。

これらの要望については、ボランティア事業が実際に稼働してから、その成果と課題、また現場の要望に対しどれだけ応じられたのか、学生の意識はいかなるものだったのかなどを通じて考察していきたい。

最後に、「通常学級の生徒への支援も大きな課題」という回答があったが、これについては今回のボランティアの対象が特別支援学級ということで、通常学級における特別なニーズのある児童生徒を直接の対象とはしていないが、特別支援教育における重要な課題であり、また先行研究も蓄積され始めている領域であることから、今後の検討材料になると考えられる。

5．まとめと今後の課題

以上のことから、石狩市の特別支援学級における学生ボランティアの活用の可能性として、授業中、休み時間、放課後、学校行事など、学校教育に関わる様々な場面が考えられ、そのニーズがあることがわかった。

このニーズに応える学生側の条件だが、まず授業の空き時間が必要であり、しかも１コマ（90 分）だけの空き時間では十分な活動が望めないことから、最低２コマ続きの空き時間が必要となる。しかし本学の学生は資格取得のために必要な単位数・授業数が多く、学年によっては２コマ続きの時間をとることが困難である。また学生は前期と後期で時間割が変わるため、通年で関われない場合もでてくる。

次に交通機関の課題がある。今回、調査Ⅱの対象となった学校のうち、大学から徒歩または自転車圏内が４校、自転車またはバス圏内が３校、バスを乗り継ぐ必要がある学校が２校であった。調査Ⅱの対象となら

なかった学校にはさらに遠隔地のところもあり、交通手段の課題は大きく、さらに地域の特性として冬季は所要時間を多く見積もらなければならない。

交通機関に関連する課題として予算の問題がある。今回のボランティア企画は、まだ試行の段階であり、予算の見通しが立っていない。「無報酬、交通費の支給もなし」という状態から始めることになる。

前述の石狩市のSAT事業では、「報酬（交通費相当額）」を支給することとなっており[9]、今回の特別支援学級ボランティアも、今後は予算の裏付けを得ることによって企画の安定した運営が望めるものと考えられる。

以上の調査研究をもとに、2014年度から本学保育学科と石狩市の特別支援学級が連携し、学生ボランティアの派遣を試行する予定である。これが実際にスタートできた際には、学校、学生と協力し、ボランティアの活用について検証していきたい。

謝辞

今回の調査に当たり、お忙しい中ご協力をいただいた石狩市立小学校・中学校の先生方、石狩市教育委員会教育支援センターの職員の方々、また授業参観に協力していただいた児童生徒のみなさんに心より感謝いたします。

文献

1）伊井義人・他：遠隔地小規模校での学習支援連携の定着への課題―藤女子大学と厚田中学校による2年間の取り組みを振り返って―，藤女子大学QOL研究所紀要(8)，pp 77-90，2013.
2）阿部包・伊井義人：石狩市の教育機関と藤女子大学の地域連携～その動向と将来的展望～，人間生活学研究(18)，pp 53-63，2011.
3）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：特別支援教育関係ボランティア活用事例集，2007.
4）黒住早紀子・前川あさ美：学生支援員への支援―特別支援教育で大学がコミュニティに提供できること―，東京女子大学紀要論集(59)，pp 147-167，2008-09.
5）山本真由美・他：特別支援教育における学生ボランティアの活用の試み，大学教育研究ジャーナル(6)，pp 102-107，2009.
6）山本真由美：特別支援教育における学習支援ボランティア学生への学内支援体制について，大学教育研究ジャーナル(10)，pp 143-151，2013.
7）土居正博：特別支援教育関係ボランティアの課題と解決の方途―プロセスレコードの活用の可能性―，創大教育研究(21)，pp 171-182，2012.
8）岡本繁：アシスタントティーチャーが生きる教育活動，肢体不自由教育（180），pp 34-39，2007.
9）石狩市教育委員会：スクール・アシスタント・ティーチャー（SAT）実施要領，2005.

Research about the special needs education student volunteer in Ishikari-City

Kunihiko KONNO
(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences,
Department of Early Childhood Care & Education)

Nobuya HASHIMOTO
(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences,
Department of Human Life Studies)

Yoshihito II
(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences,
Department of Human Life Studies)